



# 英語に見る 北ゲルマン語

森 信嘉 Mori Nobuyoshi (東海大学)

かつて学生街に欠かせないものと言えば喫茶店と古書店であった。授業をさぼって古書店を渡り歩く。何とも優雅な気分になる。読んでみたい本を適当に買いあさり、ふらりと喫茶店に入って読みふけたものだ。掘り出し物が見つかったときの感激はいつまでも心に残る。今でも古書店巡りは楽しみの一つである。日本の地方都市に行っても、海外に向いいても必ず古書店を訪ねてまわる。東京の神保町は古書街として有名であるが、どういふ訳か西ノルウェーの片田舎に突如として神保町が出現した。人影まばらなフィヨルド沿いの村に誕生した「ブークビューエン (Bokbyen)」なる古書街である。bok は book, by は town, -en は the にあたるので、英語に直訳すれば「The Booktown」といったところだろうか。イギリスの地名である Derby, Rugby, Whitby 中の -by はバイキング時代に北ゲルマン語(ノルド語)から英語に流入した語である。本来の語形は býr / bæer で、「農園」「屋敷」「町」などを意味した。

言語史的に古ノルド語は、西ノルド語(ノルウェー語、アイスランド語、フェーロー語)と東ノルド語(スウェーデン語、デンマーク語)に大別されるが、現代の分類では類型論上の類似点によりアイスランド語とフェーロー語を「離島ノルド語」、その他を「大陸ノルド語」と分類するのが一般的である。英語はドイツ語、オランダ語、フリジア語等と共に西ゲルマン語に属す。古ノルド語時



西ノルウェー、フィヨルド沿いの古書街

代の語彙は 1800 語程現代英語に残っているそうだ。動詞では cut, get, give, take, want など、名詞・代名詞では both, sister, they, their, them など、形容詞では odd, loose, ugly, weak などが一例として挙げられる。つまり、英語学習の初期段階ですでに北ゲルマン語に触れていることになる。

最近、「英語は北ゲルマン語である」という見方があり物議を醸している。主張しているのはノルウェー人言語学者であるが、この学者の説によれば、英語は従来信じられてきたように古英語を継承する言語ではないとのことである。語彙の借用のみならず、西ゲルマン語には見られないが北ゲルマン語には見られるというシンタックス上の英語との類似点を挙げて自己の主張を展開している。おかげでネット上では大騒ぎになっている模様である。この議論が今後どのような展開を見せるか予測できないが、あまり深入りせず今は静かにフィヨルド沿いの古書街に思いを馳せていた方が気が楽である。そういえば、fjord という語も古ノルド語起源であった。

## 表紙写真 について

## 水の都で迷子を楽しむ

編集部

「迷子になるのを楽しんでくださいね」一。ヴェネツィアでは、それが観光客を街に送り出すときの合言葉のようだった。入り組んだ路地に入るとすぐに自分の居場所がわからなくなる。幅1メートル、どこにもつながらりそうな路地裏の小道が広い通りにつながったり、角を曲がるといきなり運河が目の前に広がりに行き止まりになったり…。確かに、街全体が巨大な迷路のようにつくりになっていた。

ヴェネツィアで一番有名な橋は、大運河(カナル・グランデ)に架か

るリアルト橋だ。中央に向かって高くなるアーチ型の橋で、橋の上にも店が並んでいる。夕暮れ時には、リアルト橋から太陽が沈む様子を見ようと、カメラを持った多くの観光客でごったがえす。橋を渡りしばらく歩くと、近くには、さまざまな魚介が並べられた魚市場があり、日本の市場に近い光景が広がっていた。

中世のイタリアで海洋国家として繁栄をきわめた、水の都ヴェネツィア。しかし、ヴェネツィアは1797年にナポレオンに攻められ、国としての歴史は幕を閉じた。街のシンボ

ルとも言えるサンマルコ広場は、そのナポレオンによって、「ヨーロッパでもっとも美しい広場」と称えられたといい、今でもその面影は十分に残っている。

サンマルコ広場から、リアルト橋をめざして街歩きをする。ヴェネツィアングラスやレース編みなどを売るお店や雰囲気のあるレストランテ、気軽にふらっと立ち寄れそうなバルが、世界各地からの観光客を迎えてくれる。地図をあてにしないで、迷子を楽しむ、それがヴェネツィアの醍醐味だ。

